

ディケンズと教育

— 『ハード・タイムズ』と『我らが共通の友』を中心に—

中 島 彰 子

要 旨

チャールズ・ディケンズが強い関心を寄せ、多くの作品で取り上げたテーマは教育である。彼は数々の学校や教師を描くことで、当時の教育方法に対して辛辣な批判を浴びせた。その中でも『ハード・タイムズ』と『我らが共通の友』における描写、例えば、想像力を軽視した事実一点張りの詰め込み教育や、師範学校での機械的な訓練により人間性が欠如した教師像は特に印象的である。

本論では、両作品に出てくる学校や教師の場面から、ヴィクトリア朝期に行われていた教育方法とディケンズの教育観を分析するとともに、著作活動以外にディケンズが取り組んだ慈善活動との関連を考察した。

キーワード：Charles Dickens、*Hard Times*、*Our Mutual Friend*、ヴィクトリア朝、教育

はじめに

ヴィクトリア朝は子ども達に人文教養的な教育を施すことよりも、有用な知識を蓄えるため実地的な教育を施すことに関心が寄せられた時代である。特に労働者階級への教育では、慈善や愛に基づいた人間性を中心とする要素は排除され、役に立つ事実を暗記させることが教育の本質と考えられた。実際に多くの学校や公立の図書館においてフィクションは禁止されていた¹⁾のである。

チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-1870) は、こうした状況に対する痛烈な非難を表わすため数々の作品で教育問題を取り扱ったが、特に『ハード・タイムズ』(*Hard Times*, 1854) と『我らが共通の友』(*Our Mutual Friend*, 1864-1865) に登場する教育現場の描写は、当時のイギリス社会を如実に映し出す存在として、時代を問わず多

くの読者に強い影響を与えている。本論では両作品に描かれた教育に関する場面を取り上げ、当時行われていた教育方法を明らかにしながら、ディケンズの教育観を分析する。また、ディケンズ作品を効果的に読むためには、単に小説として見るだけでなく、彼の著作活動を越えた調査員やジャーナリストといった大きな次元で捉えていく必要がある。そこで、彼が実際に行った慈善活動と作品との関連も考察していく。

I. 詰め込み教育の実態

『ハード・タイムズ』は、下層階級の子ども達に対する初等教育を舞台にしている。この作品の中に描かれているのは産業都市コークタウン (Coketown) にある、グラッドグラインド (Gradgrind) が創った学校である。コークタウンは、産業革命で大きな発展を遂げたマンチェスターをモデルにしたと考えられている。グラッドグラインドの教育システムでは「事実」(Facts) のみが重視され、「想像力」(imagination) は無用のものだと考えられている。作品の冒頭に出てくる学校風景から、「事実」という言葉を繰り返す、単調な詰め込み教育が施されていることがわかる。

“Now, what I want is, Facts. Teach these boys and girls nothing but Facts. Facts alone are wanted in life. Plant nothing else, and root out everything else. You can only form the minds of reasoning animals upon Facts: nothing else will ever be of any service to them. This is the principle on which I bring up my own children, and this is the principle on which I bring up these children. Stick to Facts, Sir!” (HT, 1)

「私の求めているものは事実です。この学校の子ども達には事実のみを教えること。人生において必要なものは事実のみです。それ以外のものは引っこ抜き、決して植えつけてはならない。思考力のある動物の精神を形成できるのは、事実のみです。それ以外のものは、彼らには何の役にも立たないのです。私はこの原理に基づき自分の子ども達を育て、ここにいる子ども達も育てています。事実専念してください。」

これは校長であるグラッドグラインドが、自らの教育哲学を演説する場面である。冒頭の数行に何度も「事実」という言葉が繰り返されているように、同じ言葉を反復して使用するの、ディケンズの得意とする修辞法である。この手法によって小説の主題が読者に強く印象づけられるのである。第2章に描かれている具体的な授業風景を見てみると、この学校では大勢の子ども達が整然と並び、「小さな器」(little vessel) に喩えら

ディケンズと教育

れる彼らの頭には、ぎりぎりまで知識が詰め込まれているのがわかる。例えば、「馬の定義を述べよ」という教師の質問に対し、ここの教育システムにおいては模範生と見なされているピッツァ（Bitzer）は次のように答える。

“Quadruped. Graminivorous. Forty teeth, namely twenty-four grinders, four eye-teeth, and twelve incisive...” (HT, 5)

「四足獣で草食。40本の歯があり、24本は臼歯、4本は犬歯、そして12本は切歯です。」

グラッドグラインドが“You are never to fancy.” (HT, 7) というように、この学校では実用的な知識と関係のない物は無用で、無価値だと考えられている。ここにいる子ども達は空想などしてはいけないのである。実際に物を見たり触れたりすることがほとんどなくても、物の定義を暗記し、繰り返すことができれば、子ども達はその物を理解できたと信じているのだ。ジョン・マニング（John Manning）が『ディケンズの教育観』（*Dickens on Education*, 1959）の中で“Dickens then proceeds to devastate the abuse of the so-called “object lessons” which had deteriorated by this time into mere definitions given out by the teacher, to be memorized by the pupils with little or no reference to the objects themselves.”²⁾と述べているように、当時のイギリスでは教師が単に定義を与えるだけで、物自体を参照することがほとんどなく、生徒達に定義を暗記させるという状態にまで悪化していた。『ハード・タイムズ』の中でディケンズは、当時問題になっていた「実物教育」（object lessons）³⁾の濫用に打撃を与えているのである。また、定義した物をほとんど理解できていない生徒を描くことで、この教授方法の欠点を浮き彫りにした。⁴⁾この方法はもともと子ども達に正確に物を観察させ、分析させることが目的であったが、次第に物の定義づけが目的となり、生徒は実物に触れる機会が減っていった。それにより生徒の考え方はどんどん窮屈になり、想像力が欠如していくことになる。

ピッツァが馬の定義を答えた後、校長は“Now girl number twenty, ... You know what a horse is,” (HT, 5) と一人の女子生徒に声をかける。この学校の生徒は番号を付けられており、名前では呼ばれる事はない。「女子二十番」とされているのは、ピッツァとは対照的な人物、シシー・ジュープ（Sissy Jupe）である。シシーの父親はサーカス団に所属しており、そこでは馬を使った芸が出し物であるため、彼女が馬の定義を答えることができなくても、実際に馬と触れ合っているのだ。この学校では劣等生と見なされているシシーであるが、優等生と見なされているピッツァよりも多くの経験を積んでいるのは彼女の方なのである。

ディケンズは有用な知識の詰め込みや暗記よりも、経験が子ども達の人格形成に良い

影響を与えるということを主張している。また、感情や想像力を否定するグラッドグラインドの教育方針は、当時イギリス社会においても、権力者の多くが考えていたことであり、このままでは大半の子ども達を墮落させるに違いないと、ディケンズは強い危機感を覚えていた。グラッドグラインドは当時のイギリスで誤った教育を施していた多くの人物の代表者なのである。『ハード・タイムズ』の冒頭にグラッドグラインドの教育哲学を取り上げたことにより、ディケンズは多くの読者にこのような実情を伝えることができた。彼はこの作品を通じて当時の教育方針に対するメッセージを描き、少しでも教育が改善されるよう努めたのである。

Ⅱ. 師範学校出身の教師達

グラッドグラインドの学校では、師範学校 (training college) で免許を得たばかりのマクチョーカムチャイルド (M'Choakumchild) という教師が教えている。ディケンズは彼を次のように表現している。

He and some one hundred and forty other schoolmasters, had been lately turned at the same time, in the same factory, on the same principles, like so many pianoforte legs. Ha had been put through an immense variety of paces, and had answered volumes of head-breaking questions ... Ah, rather overdone, M'Choakumchild. If he had only learnt a little less, how infinitely better he might have taught much more! (HT, 8)

彼と140人あまりの教師たちは同時に、同じ数のピアノの脚のように、同じ工場で同じ原理に基づいて最近生産された。限りない多様性の能力を試し、頭が破裂しそうな多くの質問にも答えた。—ああ、やり過ぎだった。マクチョーカムチャイルドさん。もし彼の学んだことがこんなに多くなければ、もっとたくさんのもっと良く教えることができただろうに。

これはできるだけ多くの知識を詰め込むという、機械的な訓練を受けてきた有資格教師に対しての痛烈な風刺である。ディケンズは師範学校を「工場 (factory)」とし、教師達を工場で大量生産された物に喩え、当時の教員養成制度に批判的な態度をとった。更にマクチョーカムチャイルドの名 (M'Choakumchild) が「子ども (child) を窒息 (choke) させる」という意味に由来することからもわかるように、彼は子ども達に教育を施すどころか、彼らの人間性や想像力が豊かになることを妨げる存在なのである。そして自分と同じように子ども達にも知識を詰め込むことで、ピッツァのように想像力

ディケンズと教育

の欠乏した生徒を増やしていくのだ。しかしこの作品では、マクチャーカムチャイルドが出てくる場面が少ないため、ディケンズの批判もあまり効果的ではない。

彼はこの10年後に発表された『我らが共通の友』においてブラッドリー・ヘッドストーン (Bradly Headstone) という有資格教師を描く時にも同じような批判を繰り返しているのです、以下に示す。

He had acquired mechanically a great store of teacher's knowledge ... There was a kind of settled trouble in the face. It was the face belonging to a naturally slow or inattentive intellect that had toiled hard to get what it had won, and that had to hold it now that it was gotten. He always seemed to be uneasy lest anything should be missing from his mental warehouse, and taking stock to assure himself. (OMF, 217)

彼は機械的に教師としての豊富な知識を蓄えた。一彼の顔には、常に苦勞が表れていた。生まれつき鈍くて怠慢な知性しか持っていなかった彼が苦勞して手に入れたもの、それを持ち続けるために、常に苦勞しているという顔であった。彼はいつも自分の知的倉庫から何かがなくなっていないかと不安で、自分を安心させるために常に在庫確認をしているようであった。

ヘッドストーンは非常に貧しい環境で育ったため、自分に対する劣等感を持ちながらも自力で這い上がり、教師になる資格を得た26歳の青年である。人一倍プライドは高く、いつも上品な服装に身を包んでいるが、顔には苦勞が滲み出ている。ユージーン・レイバーン (Eugene Wrayburn) という有産階級出身の弁護士に対抗意識を燃やしており、彼の内には詰め込んだ知識がなくなることの恐怖や有産階級に対するコンプレックスと、どの階級にも属さない不安定な立場に対する不満が錯綜し、独特の陰鬱な雰囲気を出している。マクチャーカムチャイルドと同じように「墓石 (Headstone)」という滑稽な名前を付けられている点からも、ディケンズの教育批判を体現する人物だとわかる。以上のことから、ヘッドストーンは教員養成制度で受けた教育がいかに「機械的」(mechanically) なものであったかを表すのに、マクチャーカムチャイルドよりも十分な性格描写がなされていると言える。

ここで当時の師範学校は実際にどのような状況であったか、フィリップ・コリンズ (Philip Collins, 1923-2007) が詳しく調査しているのを見てみよう。次の引用は、1858年の国民教育調査のために作られたニューカースル審議会において、ある師範学校の校長が教員養成の訓練について言及する場面である。

Let us look at the programme of subjects required to be known by the students. Their character and their number at once indicate that the present course pursued in training schools tends to *impart information* rather than to *develop the faculties and to discipline the mind*. Vast demands are made on the memory, little is done for the improvement of the judgment or reasoning powers ... To use a very significant and very intelligible expression, the great feature of the course of study pursued in training colleges is *cram*. (Collins, 151)

この校長によると、師範学校でなされている訓練というのは、「能力を伸ばすことや、精神を鍛えることよりも知識を与える」という傾向にあった。それはまさに「詰め込み」(cram)教育である。このような学校を卒業した学生の中から、マクチャーカムチャイルドやヘッドストーンのように、知識は豊富だが事実のみを重視し、想像力が乏しく、活気のない教師が何人も生まれたのである。そして多くの学校において知識を機械的に詰め込む授業が行われた。グラッドグラインドの学校における優等生ビッツァも、“His skin was so unwholesomely deficient in the natural tinge, that he looked as though, if he were cut, he would bleed white.” (HT, 5) と描写され、彼の顔色はまるで白い血が流れているような不健康なものである。彼らには詰め込み教育による悪影響がよく表されていると言えよう。

前述したような教師たちを生み出した教員養成制度 (pupil-teacher system) というのは、19世紀初頭では監督生方式が主流であった。まず1人の教師が年長の生徒何人かに課業を教える。その生徒たちは監督生と呼ばれ、教えられた課業をまるで鸚鵡のように10人ぐらいの子ども達に繰り返すのである。しかしこの方式では監督生は自分が理解できない科目を教えることができた。そこでジェイムズ・ケイ・シャトルワース (James Kay-Shuttleworth, 1804-1877) が、それに代わる新しいシステムの発展に貢献した⁶⁾。彼は有望で将来教師になる人材を先生のもとで8歳から13歳までの五年間、助教師を勤めさせてから師範学校で2年間勉強させるやり方を考えたが、十分に政府からの援助金が手に入らず失敗に終わる。それでも彼はあきらめず、1840年2月バタシー (Battersea) に教員養成学校を設立した。彼は13歳に達した生徒達を見習いあるいは教生として5年間校長先生の下で修業させることにし、昼間は先生として教室で教え、夜は生徒として校長に教えてもらうという新たなシステムを考えた。そして生徒達は報酬として下賜金を受けるとする地位とするという制度を作るよう、シャトルワースは働きかけたのである⁷⁾。この制度で教生として登録されていた女王給費生 (Queen's Scholars) の第1期生が1853年に師範学校を卒業し、教職に就いた⁸⁾。師範学校の卒業生がどのような教師になり、どのような授業を行ったのかという新たな関心が向けられた頃に『ハード・タイムズ』は

発表されたのである。

『我らが共通の友』にはチャーリー・ヘクサム (Charley Hexam) という少年が登場する。ヘッドストーンは貧しくても勉強熱心なチャーリーを見て、昔の自分の姿を重ねたのであろう。チャーリーに大いなる期待を抱き、自分と同じように師範学校へ行かせようとした。チャーリーの父親はロンドンの仮想生活の中でも、最下層の部分⁹⁾を占める稼業をやっていた。父親はもちろん教育を受けておらず、チャーリーが学校に行くのも断固として反対していたが、姉のリジー (Lizzie Hexam) は弟の能力を心から認め、彼の将来を次のように占う。

“... There are you, Charley, working your way in secret from father, at the school; and you get prizes; and you go on better and better ... You come to be a pupil-teacher, and you still go on better and better, and you rise to be a master full of learning and respect.” (OMF, 29-30)

「お父さんには内緒で、学校で頑張っているあなたが見えるわ、チャーリー。そして賞をもらうの。それからどんどん偉くなって一見習い教師になって、どんどん偉くなって、深い学識のある、尊敬される先生になるわ。」

空想のイメージである火を見つめながらリジーが思い描いた弟の未来は、まるでヘッドストーンが成し遂げた立身出世物語のようだ。当時はサミュエル・スマイルズ (Samuel Smiles, 1812-1904) が『自助論』 (*Self-Help*, 1859) で説いた自助の哲学のように、勤勉と忍耐によって大成功を収めることが目標とされていた時代である。下層階級から這い上がるため、正規の学校教育を受けることなく独学で知識を増やし、教師を目指す若者がどんどん増えていた。スマイルズの自助の哲学¹⁰⁾の特徴は、子どもにとって小説は害と考え、役に立つ知識を重視している点である。それはまるでグラッドグラインドの哲学を思い起こさせるものだ。

リジーが父親に内緒でお金を貯めたおかげで、チャーリーはヘッドストーンが教鞭を執っている国民学校に通うことができた。この学校ではどのような授業がなされていたのだろうか。実際にヘッドストーンが授業をする場面はほとんど出てこないが、同じ学校で働く先生ピーチャー (Miss Peecher) と生徒メアリ・アン (Mary Anne) の対話を見てみよう。

... 'how often have I told you not to use that vague expression, not to speak in that gen-

eral way? When you say *they* say, what do you mean? Part of speech They?’

Mary Anne hooked her right arm behind her in her left hand, as being under examination, and replied :

‘Personal pronoun.’

‘Person, They?’

‘Third person.’

‘Number, They?’

‘Plural number.’

‘Then how many do you mean, Mary Anne? Two? Or more? ... (OMF, 220)

「そのような曖昧な表現や漠然とした言い方をしてはならないと、今まで私は何度言いました? “they”とはどういう意味で言っているのです? “they”の品詞は?」

メアリ・アンは右腕を背後にまわし左手で掴まえ、試問中の体勢になり、答えた。

「人称代名詞です。」

「“they”の人称は?」

「三人称です。」

「“they”は単数ですか? 複数ですか?」

「複数です。」

「それでは、何人を意味するのですか? 2人? 3人? それともそれ以上ですか?」

ピーチャーは小柄で明るく、こぎれいで几帳面な、とても健康的な先生で、ヘッドストーンに恋心を抱いている。学校では花に水をやり、人間らしく魅力的な若い女性として描かれているが、そんな彼女でさえ、生徒にとっては退屈でしかない文法中心の教えを施している。彼女も師範学校の詰め込み教育を受けてきたのだろう。この描写から、当時の学校においてどのような授業がなされていたかがわかる。ディケンズはピーチャーのように好感を持てる人物にも、師範学校における訓練の弊害を表しているのである。

Ⅲ. 貧民学校

チャーリーが今の学校に入る以前はもっと環境が悪く、他の学校には受け入れてもらえない貧しい子ども達が大勢いる学校、いわゆる貧民学校 (Ragged School) に通っていた。その様子は『我らが共通の友』第2巻・第1章の冒頭から数ページに渡り、次のように描写されている。

The school at which young Charley Hexam had first learned from a book — the streets being, for pupils of his degree, the great Preparatory Establishment in which very much that is never unlearned is learned without and before book — was a miserable loft on an unsavoury yard. Its atmosphere was oppressive and disagreeable; it was crowded, noisy, and confusing; half the pupils dropped asleep, or fell into a state of waking stupefaction; the other half kept them in either condition by maintaining a monotonous droning noise, as if they were performing, out of time and true, on a ruder sort of bagpipe. The teachers, animated solely by good intentions, had no idea of execution, and a lamentable jumble was the upshot of their kind endeavours ... Contrariwise, the adult pupils were taught to read (if they could learn) out of the New Testament; and by dint of stumbling over the syllables and keeping their bewildered eyes on the particular syllables coming round to their turn, were as absolutely ignorant of the sublime history, as if they had never see or heard it ... In this way it had come about that Charley Hexam had risen in the jumble, taught in the jumble, and been received from the jumble into a better school. (*OMF*, 214-6)

若きチャーリー・ヘクサムが初めて本で勉強した学校は—いかがわしい路地裏の悲惨な屋根裏にあった。異常に蒸し暑く不愉快で、混雑しており、騒がしくて混乱するような雰囲気、生徒の半分は居眠りをしているか昏睡状態という有様であった。—教師は善意だけで動いていたので、どのように授業を行えばよいかもわからず、彼らの努力は嘆かわしい混乱を生み出す結果となった。—大人の生徒達は習得することができらうと、新約聖書を読むことを教えられていた。しかし単語に詰まるばかりで—崇高な歴史を全く知らず、まるで彼らは聖書を見たことも読んだこともないのと同じであった。—このようにしてチャーリー・ヘクサムはこの混乱状態の中から出世し、混乱状態の中で教え、混乱状態よりはましな学校で受け入れられたのである。

ディケンズが作中で貧民学校について「混乱状態」(jumble)という言葉は何度も繰り返して使い、その最悪の環境について詳しく描く事ができたのは、実際に貧民学校を視察した経験からである。また、ここで描かれている教師というのは、以前から彼が非難を浴びせてきた無資格教師が主である。教え方もわからない善意だけの教師が、飢えに苦しみ、善悪の判断もできないような子ども達に教義を説いても無意味であるとディケンズは強く感じた。また、子どもに悪影響を及ぼすほどの環境の悪さは、早急に改善が必要だと考えた。

では、ディケンズが大きな関心を抱いた貧民学校について簡単に説明しておこう。もともと貧民学校というのはジョン・パウンズ (John Pounds, 1766-1839) というポーツマスの靴職人が、近所の貧しい子どもたちを自分の仕事場に呼び、無料で読み書きを教え、食事を作ってやり、靴の修繕もしてあげたことから始まった¹¹⁾と考えられている。彼が亡くなった1839年以降にこの学校は多くの人々に知られるようになった。

1843年9月14日、ディケンズは以前から親交のあったアンジェラ・バーデット＝クーツ (Angela Burdett-Coutts, 1814-1906)¹²⁾とサフロン・ヒル (Saffron Hill) のフィールド・レイン貧民学校 (Field Lane Ragged School) を視察した。サフロン・ヒルとは『オリヴァー・トゥイスト』 (*Oliver Twist*, 1837-1839) に登場する悪党フェイギン (Fagin) の巣窟があるとされた場所である。その後ディケンズの貧民教育への関心は更に高まり、彼は幾度もロンドンにあるそのような学校を訪れるようになった。また、フィールド・レイン貧民学校が寄付を求める広告などを出したことにより、多くの著名人も貧民学校に寄付をするようになった。その影響もあり、1844年には200人もの教師が「貧民学校連合」 (The Ragged School Union) を結成するに至った。

ディケンズが1852年にフィールド・レイン貧民学校を視察した時の様子は『ハウス・ホールド・ワーズ』 (*Household Words*) に「われわれを驚かす怠慢」 (*A Sleep to Startle Us*)¹³⁾ というタイトルで掲載されている。その中でディケンズはこの学校が大いに改善されたことを書いているが、未だに良い教師が少ないことを批判している。貧民学校のほとんどがボランティアの教師によって授業がなされていた。そのため、教え方もわからない質の悪い教師が多かった。ディケンズは子ども達のためにもっと良い施設を用意し、もっと良い教師を雇うことが早急に必要であると考えた。

ここからは貧民学校に関する資料から、その実情を明らかにしていきたい。ジョン・パウンズの学校を基に、エディンバラに貧民学校を設立したトマス・ガスリー (Thomas Guthrie, 1803-1873)¹⁴⁾によると、浮浪児たちの状況は改善されたと述べ、貧民学校の教室が満員になるにつれて、刑務所の独房は空きが出ると書いている。特に14歳から16歳までの青少年に関するデータを見ると、11年間で罪を犯した青少年の数は4分の1ほどに減っているので貧民学校による効果は出ていたといえよう。実際に貧民学校は犯罪が多発する地域に建てられていたし、“By means of Ragged Schools, thousands of miserable children have been turned into happy and valuable members of society.”¹⁶⁾というガスリーの言葉からも、教育内容はさておき、浮浪者同然の子ども達にとっては良い影響を与えていたといえる。しかしまだ改善されていないことは多く残っていた。ここからは、前述した「貧民学校連合」の雑誌である、『貧民学校連合マガジン』 (*The Ragged School Union Magazine*)¹⁷⁾の内容を読み取っていく。

ディケンズと教育

The great aim of Ragged Schools, we confess and rejoice, is, to impart religious instruction. Other objects the undoubtedly have; but these are all subordinated to the chief end of bringing neglected and ignorant children within reach of the doctrine of Christ. His religion is adapted to every class and every type of fallen humanity. (*The Ragged School Union Magazine*, 232)

ここに書かれているように、「貧民学校の最大の目的は宗教教育を施すこと」であったため、授業内容は宗教が中心であった。貧民学校に関してディケンズが特に問題視したのは、宗教の教えが中心という授業内容である。貧民学校の関係者は教育熱心なのだが、政府から援助金が拠出されることを恐れていた。なぜなら援助金を貰うということは政府からの干渉が入るということであり、そのために宗教教育を施すという最大の目的を果たせなくなる可能性があるからだ。ディケンズは政府からの援助金があれば生徒達のためにもっと良い施設を用意することができ、もっと良い教師を雇えると考えた。また、知識がほとんどない生徒に、難解な宗教教育を施しても何の意味もないと感じていた。

『貧民学校連合マガジン』¹⁸⁾の記録によると、当時フィールド・レイン貧民学校は月曜日から金曜日、そして日曜日に開いていた。平日の昼間は150人、夕方は45人、日曜は390人もの生徒がここで学び、その人数に対して教師は24人しかおらず、そのうち有給の教師は2人だけで、後の22人はボランティアであった。1849年のロンドン全体における貧民学校の状況は、学校数は82校あり、日曜学校の生徒数が8130人、平日の生徒数が4295人、夜間の生徒数が4824人であった。教師の数はボランティアが929人で、そのうち給料を貰っているのは124人しかいなかった。貧民学校の教室は不潔で、設備も整っておらず、ほとんどがボランティアの教師によって授業がなされていた。このような実情を踏まえてディケンズは貧民学校を否定的に描いたのである。しかし、彼は当時の教育方針に反対でも、貧民学校や師範学校がなくなればいいと考えていたわけではない。彼が何度も貧民学校へ足を運び、募金運動の援助もするきっかけとなったのは、ユレイニア・コテッジ (Urania Cottage) というホームレスの女性のためのリハビリセンターを設立した¹⁹⁾ことである。貧民学校から多くの女性が選ばれ、このコテッジへ仮入所が許された。そしてもう一つの要因としては、ディケンズ自身の生い立ちにあり、彼は貧民学校の子どもたちに同情せざるをえなかったと考えられる。

ディケンズには父親が借金のためマーシャルシー債務者監獄へ入れられ、幼い彼もそこで過ごすという惨めな時期があった。ディケンズは12歳の時に靴墨工場へ働きに出され、それは数ヶ月という短い期間であったが、朝から晩まで働かされた経験は少年の心に深い傷を残した。その頃の精神的苦痛は彼が小説を執筆する際にも大きな影響を与え

ることとなる。“I know that, but for the mercy of God, I might easily have been, for any care that was taken of me, a little robber or little vagabond.”²⁰⁾という言葉からもわかるように、ディケンズ自身ももう少しのところで浮浪児になるかもしれない境遇にあった。後に父親に遺産が舞い込み靴墨工場での仕事を辞めた彼は、それから2年半学校に通うことができた。彼が通ったウェリントンハウス・アカデミー (Wellington House Academy) は、彼の自伝的小説『ディヴィッド・コパフィールド』 (*David Copperfield*, 1849-50) 第7章に詳しく描かれているが、当時はまだ義務教育制度がなかったため学校的环境や教育内容はあまり良いものではなかった。ディケンズは自らの経験や独力で成し遂げた勉強によって多くの知識を得たのだ。彼が少しでも貧民に対する教育が改善することを心から願っていたのも、このような過去の出来事があったからである。

IV. 詰め込み教育の弊害

マクチョーカムチャイルドの登場回数は少なく、第3章以降は授業風景もほとんど描かれていない。『ハード・タイムズ』の後半ではグラッドグラインド家の子ども達や、一緒に暮らすことになったサーカス団員の娘シーなど、家庭での教育に焦点が絞られていく。

ヘッドストーンの結末は次のように描かれている。貧しい生活から身を起し、自分の力だけで教師になるという立身出世を成し遂げたヘッドストーンは、チャーリーの姉リジーに好意を寄せるのだが、恋敵レイバーンを恨み、殺人未遂にまで発展する。殺人未遂について自分を恐喝してきた相手を殺そうと考え、格闘した後、一緒に河で溺死してしまう。ディケンズは、ヘッドストーンに潜在する不安を絶妙に描き、その要素を犯罪にまで結びつけることに成功した。従ってマクチョーカムチャイルドよりも興味深い人物として評価されているのだ。また、今まで努力して築いてきた地位が一瞬にして崩れたヘッドストーンは、詰め込み教育の犠牲者だとも考えられる。

一方のチャーリーは師範学校を卒業し、姉の予想通り教師になっていた。ヘッドストーンが殺人犯だと気づいたチャーリーは、ヘッドストーンから施された恩も忘れ、非情にも彼との縁を切った。そしてチャーリーはもっと上の世界を目指し、出世街道をまっしぐらに進むのである。

ディケンズは『クリスマス・キャロル』 (*A Christmas Carol*, 1843) に描いたように、以前から「無知」と「犯罪」を結びつけて考えていた。多くの知識を得たはずのヘッドストーンが罪を犯して、身を滅ぼすという悲惨な結末をつけた理由としては、彼には「知識」はあっても「知恵」がなかったのだと考えられる。『ハード・タイムズ』に登場するシーはサーカス団員の娘であり、学校では将来性のない、劣等生と見なされてい

ディケンズと教育

るが、サーカス団員との「経験」を積んでいるという点で、特異な存在である。彼女は教室における事実一点張りの授業よりも大切な、生きる「知恵」を自然に身につけてきたのだ。シシーはマクチョーカムチャイルド、ピッツァ、ヘッドストーン、チャーリーとは対照的に、多くの経験を積むことで想像力が豊かになり、心と心の触れ合いを大事にする人物である。ディケンズはシシーのように人間味にあふれた教師の必要性を説いた。また、ディケンズの巧みな技術により、当時の社会において下層階級から這い上がった有資格教師は、非常に立場が不安定な職業であることがわかった。

おわりに

両作品における描写を分析して明らかになったディケンズの教育観において特に強調されているのは、想像力の重要性和、子ども達に対する教育方針の改善を要求していることである。師範学校で訓練されたマクチョーカムチャイルドやヘッドストーンのような教師に対しては、彼らにはもっと広い視野と想像力が必要であると考へた。ディケンズは学ぶことの大切さを伝えながらも、機械的で想像力を軽視した事実一点張りの詰め込み教育の訓練を受け、多大な知識を詰め込まれることで人間性や理解力を失っていく人物を描くことに成功している。そして教師は学校において、機械的に定義を暗記させるだけではなく、生徒達の精神を鍛え、想像力を豊かにさせ、彼らの人格形成を積極的に支援しなければならない。そのためには教師に能力と人格がともに備わっている必要があるというのがディケンズの主張である。

『我らが共通の友』が完成した小説としてはディケンズの最後の作品である。「富」と「愛」など、読者に伝えたかった数々のテーマが交錯する、彼の集大成ともいえる作品であり、『ハード・タイムズ』にも描いた詰め込み教育と機械的な教師のイメージ、そしてヘッドストーンの死という結末を織り交ぜたことによって、当時の人々に教育方針の改善を意識させることに大いに貢献したといえる。また、ディケンズが望んだ教育改革は、現在における教育問題と結びつく部分があることを忘れてはならない。

注

テキストはThe Oxford Illustrated Dickens (London: Oxford UP) を使用した。『ハード・タイムズ』はHT、『我らが共通の友』はOMFと略記し、引用箇所の括弧内に頁数を示す。なお、本論の日本語訳はすべて筆者による。

- 1) ヴィクトリア朝の教育に関しては、リチャード・D・オールティック『ヴィクトリア朝の人と思想』要田圭治・大嶋浩他訳（音羽書房鶴見書店、1998）第7章を参照。
- 2) John Manning, *Dickens on Education* (Toronto: U of Toronto P, 1959) 140
- 3) 「実物教育」についてはManning 129-30を参照。また、V. T. J.アークル『イギリスの社会

と文化二〇〇年の歩み』松村昌家・森道子他訳（英宝社、2002）第2部・第7章「宗教と教育」にも詳しい。

- 4) Manning 19-20
- 5) Philip Collins, *Dickens and Education* (London: Macmillan, 1963) 148-9
- 6) Frank Smith, *The Life and Work of Sir James Kay-Shuttleworth* (London: The John Murray, 1923) 106
- 7) 詳しくはSmith, 第6章を参照。
- 8) Collins 148-9
- 9) その職業に関しては松村昌家『ディケンズの小説とその時代』（研究社、1989）223に詳しい。
- 10) Samuel Smiles, *Self-Help: With Illustrations of Character and Conduct* (London: Routledge, 1997) 269
- 11) Manning 80
- 12) クーツについてはManning 168などを参照。
- 13) Michael Slater, ed. *Gone Astray and Other Papers from Household Words, 1851-59.* (London: J. M. Dent, 1999) 49-57
- 14) Thomas Guthrie, *Seed-time and Harvest of Ragged Schools* (Edinburgh: Adam and Charles Black, 1860)
- 15) Guthrie 155
- 16) Ibid., 168
- 17) *The Ragged School Union Magazine 1849-1873.* (Brighton: Harvester Press Microform, 1981) 1856
- 18) Ibid., 1849
- 19) Manning 187
- 20) John Foster, *The Life of Charles Dickens* (London: Dent, 1966) 25

ディケンズの生涯についてはAngus Wilson, *The World of Charles Dickens* (London: Martin Secker & Warburg, 1970)、松村昌家編『ディケンズ小事典』（研究社、1994）、西條隆雄・植木研介他編著『ディケンズ鑑賞大事典』（南雲堂、2007）なども参照されたい。